

新興語法 “V 着” に関して

—《二十年目睹只怪現狀》の例を中心に

稲垣 智恵

On the Usage of “zhe” as a New Grammatical Term:

Focusing on the Usage of “*Ershi nian mudu zhi guai xianzhuang*”

INAGAKI Tomoe

The Chinese aspect particle “zhe (着)” can be categorized as the end result of continuation of movement and existence of movement “Zhe” is often used to link with verbs to express movement such as “chi (吃, eat)”, “kan (看, see)”, “shuo (说, speak)”; meanwhile it is difficult to use in linking with verbs to express psychological activities such as “xihuan (喜欢, like)”, “danxin (担心, worry)”, “jidu (嫉妒, be jealous of)”, “juede (觉得, think)”; verbs to express existence such as “zai (在, exist)”, “cunzai (存在)”; and verbs to express attributes such as “shi (是, be)”, “shuyu (属于, belong to)”. However, the usage of “zhe” has increased as linked with verbs to express states such as “youzhe (有着)” since the 20th century, which means that numerous preceding studies have described it. About such usage of “zhe” as a new grammatical term, there are many things to consider as to structure affected by foreign languages in precedent studies. However, there is not yet an established theory as to what structure or language influenced said usage.

This report analyzes usage of “zhe” in “*Ershi nian mudu zhi guai xianzhuang* (二十年目睹只怪現狀)” and compares it with the usage of “zhe” in novels written in colloquial language in Chinese literature of the 19th century and Chinese novels of the early 20th century. This study attempts to show how “zhe” changed, whether foreign language influenced this structure or not, and if so which structure had said influence.

キーワード：新興語法 (New grammatical term)、[V 着] (“verb+zhe (着)”)、助詞 (Aspect particle)、言語接触 (Language contact)

1 はじめに

現代中国語のアスペクト助詞“着”は大きく分けると、動作の「持続」と動作結果の「残存」を表すとされることが多い。“着”は一般的に“吃”，“看”，“说”など動作性の強い動詞と付着して用いられることが多く，“喜欢”，“担心”，“嫉妒”，“觉得”のような心理活動を表す動詞や，“在”，“存在”などの存在を表す動詞，“是”，“属于”などのような属性を表す動詞といった状態性の動詞には付着することが難しいとされる。しかし、多くの先行研究が述べているように、20世紀以降，“有着”のような例をはじめとして、状態性の動詞に“着”が付着する用例が増加した。このような「新興語法」としての“着”の用例について、先行研究では外国語の影響を受けた構造であると考えられるものが多い。だが、実際にどの言語のどのような構造の影響を受けたものなのかに関しては、まだ定説はないと言っていい。

本稿では、こうした“着”の用法が近現代どのように変遷したのか、またその変遷に外国語が影響していたのかどうか、していたとすれば、どのような構造が影響していたのかに関する研究の一環として、《二十年目睹之怪现状》中の“着”の用法を分析し、19世紀の白話小説や、20世紀初頭の中国語小説における“着”の用法と比較する。

2 研究の目的及び方法

(1) 研究の目的

新興語法としての“着”は、以下のような特徴を持っていると考えられる。¹⁾

- 一. 状態性の強い動詞（思考・心理動詞及び属性動詞）の後ろに置かれる。
- 二. 目的語は抽象的なものであることが多い。
- 三. “着”を付けなくても意味上大きな違いがなく、文章が成立する。
- 四. “一直”と置きかえることが可能な場合が多い。

こうした“着”の用法は、先行研究では五四時期以降多く現れるようになったとされている。また、王力(1945)²⁾が“有着”の例を上げて述べているように、1940年代以降も一定の使用が

1) 稲垣智恵「新興語法としての“着”について」『關西大學中國文學會紀要』第37号、関西大学中国文学会、2016年3月、pp. 217-240

2) 王力(1945)《中国语法理论》(《第六章 欧化的语法》《王力文集》第一卷、山東教育出版社、1984年11月、p. 433-502)

見られ、現在でも、特に科学技術文献に於いて、多く例が見られる。³⁾ 注目すべきは、“着” が付着しづらいとされる属性動詞 “存在” に付着した例がとりわけ多いことである。⁴⁾

- (1) 在德国古典哲学的研究中发现科学技术文化与理性文化之间存在着矛盾。⁵⁾
- (2) 江泽民同志在十五大报告中指出：“一切符合三个有利于的所有制形式都可以而且应该用来为社会主义服务”但在现实中仍然存在种种错误观念，严重影响着“三个有利于”标准的实施。……
- (3) 作为“中国化建”下辖的全资分公司——巨石集团的情况如何，基本上决定着“中国化建”是泡沫还是黑马。

管見によれば、こうした特徴を持つ “着” は20世紀初頭の翻訳文献中に多く見られ、最も早い時期では、1920年に魯迅が翻訳・発表した《一個青年的夢》⁶⁾ 中に大量の用例が見られる。

- (4) 那里的話。我說這話，並非責難你。我是喜歡着。但現在是一位活着的人在這里。《《一個青年的夢》》
いや私はあなたを非難する爲にさう云つたのではありません。私は嬉しいのです。
しかしこゝには生きてゐる方が一人いらつしやいます。(『ある青年の夢』)
- (5) 我不願拿別國做自己的屬國，拿別國做了屬國高興着的時代，已經過去了。(同上)
私は外國を自國の屬國にしたいとは思つてゐません。他國を屬國にしてよろこぶ時代は既に過ぎてゐます、(同上)
- (6) 更去會那寄頓着你們的士官，——這人現在也在這裏，而且還在後悔着，——向他問你們的事。(同上)
そしてあなた達をあづけた士官、その人もこゝにゐますが、そして今はそのことを後

3) BCC コーパス (<http://bcc.blcu.edu.cn/>) 北京語言大学大数拠與語言教育研究所, 2016年10月30日閲覧

4) BCC コーパス科学技術文献分野検索に於いて、“存在着”(103332例)は“隨着”(357006例)に次いで二番目に使用が多い例となっている。

5) 本稿で使用する漢字(簡体字及び繁体字)は、引用元文献によるものとする。

6) 魯迅翻譯〈一個青年的夢〉《新青年》7卷2-3号, 1920年, 原文は武者小路実篤著『或る青年の夢』(1916年)

悔してゐますが、その士官に逢ひましたので、あの人達はどうしたとき、ました（同上）

こうした用例はその後も多く現れ、魯迅以外の翻訳文にも多い。

（7） 以我底想以洋畫立身的空想而想在這裡有着永住之家，也不是沒理吧。

（〈湯原通信〉《小説月報》13卷2号，1922年，美子翻訳）

洋畫に依つて身を立てやうといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。（『湯ヶ原より』国木田独歩，1902年）

1910年代には、白話文で書かれた小説であっても、こうした用例は少ない。現段階では新興語法としての“着”が最も初期に、大量に用いられたのは、1920年の日本語からの翻訳小説に於いてであると述べることはできるが、これらの用法が日本語の影響を受けて現れたのかどうかは未だ不明である。ただ、20年代から30年代にかけて、こうした新興語法的特徴をもつ“着”の用例が翻訳文に限らず中国語の中で多く用いられたことは間違いない。先行研究では以下のような用例が挙げられている。

（8） 这就证明着我的工作的切实（魯迅《伤逝》1925）

（9） 然而因为这新兴阶级的自身内包含着若干矛盾，（茅盾《“五四”运动的检讨》，《文学导报》1931年第1卷第2期）

（10） 她自己也不知道有这种东西存在着，但这东西却开始活动起来了。（巴金《家》1933）

（11） 有着“武器的艺术”的非革命无学家也玩起这玩意儿来了。（魯迅《“醉眼”中的朦胧》《语丝》1928年第4卷第11期）

（12） 在我们面前有着各色各样的人。（周揚《典型与个性》《文学》1936年第6卷第4期）
（以上、賀陽（2008）⁷⁾より）

しかしながら、五四時期直前の状況、特に1900年代から1910年代にかけての白話研究には未だ空白があり、この時期の“着”の用法についても不明な点が多い。この時期“着”はどのように用いられていたのか。「新興語法」の特徴を持つような用例は見られないのか。本稿では

7) 賀陽（2008）《現代汉语欧化语法现象研究》商務印書館

《二十年目睹之怪現狀》の用例を分析することで、1900年代の“着”の使用状況について検討する。

(2) 研究の方法

動態助詞“着”は、《現代汉语八百詞》⁸⁾や《实用現代汉语語法》⁹⁾王学群(2007)¹⁰⁾を始めとして、これまで多くの優れた先行研究が発表されている。これらの研究では、多く“着”は動作の「持続」と動作結果の「残存」を表すと捉えている。こうした見解は“着(zhe)”に関する研究において定説であるといっている。しかし、木村(2012)¹¹⁾のように「ZHEが接する動詞は定位動詞(動作の対象となる具体物が動作遂行の結果として特定の空間に存在する状況を含意する動詞)の類に限られている」という点に着目し、動詞に付着する“着”は、「一定の文法化を果たしてはいるものの、機能的にはなお結果補語の延長上に位置する」ものであり、「場所への『付着』を意味する動詞“着(zhuó)”の語彙的意味を若干留めつつ、なお空間表現の域に留まる文法形式であり、動作や事態の時間的的局面を捉えるアスペクト形式とは認めがたい」とする意見もある。管見によれば、確かに“着(zhe)”は“穿”“帶”“写”など付着を表す動詞に後置される例がかなり多く、こうした例は動詞としての“着”の意義により近いものと考えられる。“着(zhe)”が動態助詞か否かについては今後更に検討する必要があるであろう。しかしながら、今回はひとまずこれを従来の定説通り動態助詞とし、その用法とその前後の付着成分について研究を進めたい。

本研究では、《現代汉语八百詞》に基づいて“着”の用法を分類した上で、以下の4つの用例を研究対象とする。

一. 動作が今進行していることを表す。

動詞の前に副詞“正在”“在”などをつけることができる。: 動詞+“着”

(13) 妈妈读着信, 脸上露出高兴的神色。

8) 呂叔湘主編・牛島徳次・菱沼透監訳(2003)『中国語文法用例辞典』, 東方書店, 《現代汉语八百詞増訂本》日本語版)

9) 劉月華・潘文娛・故韡(2001)《实用現代汉语語法(増訂本)》, 商務印書館

10) 王学群(2007)『中国語の“V着”に関する研究』, 白帝社

11) 木村英樹『中国語文法の意味とカタチ——「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究——』白帝社, 2012年5月, pp. 146-149

二. 状態の持続を表す。

動詞の前に副詞“正在”“在”などをつけることができない。：動詞／形容詞＋“着”

(14) 门开着。

三. 存在文に用いる：(場所)＋動詞＋“着”＋名詞

(15) 手上拿着一本汉语词典。

四. 連動文を構成する：動詞1＋“着”＋動詞2

(16) 坐着讲。

(17) 忙着准备出发。

(18) 想着想着笑了起来。

また、発音は“zhe”と発音するものみに限定する。

本研究の最終的な目的は、“着”の用法を分類することではなく、動詞に付着する動態助詞としての“着”が1900年代に於いて如何に使用されていたか、そこに1920年代以降に見られる新興語法的な用法は見られるかどうか分析することである。動態助詞“着”に関してその用法の変遷を通時的に見た場合、付着できる前置動詞の増加、目的語の性質の変化という2点が考えられる。そのため、本研究では“着”が付着する前置動詞と、後置される目的語についても分類、定義することが必要となる。本稿では“着”が付着する動詞の分類を王学群(2007)、《实用现代汉语语法》(2001)に倣い、大きく以下のように分類する。

一. 動作動詞：切、割、炒のような主体(人間)の動作を表す

二. 変化動詞：断、塌、裂のような主体(人間・もの)の変化を表すものを指す

三. 思考・心理活動動詞：想、思考、希望のような主体の思考・心理活動を表すものを指す

四. 属性動詞：有、在、存在のような存在を表すもの、是、属于、等于のような関係を表すもの、そして能願動詞等を指す。

また、品詞分類に関しては、《现代汉语词典》¹²⁾を参考にする。

後置される目的語は、大きく抽象的なものと具象的なものに分ける。しかしながら何を抽象とし、何を具象とするかは、中国語に於いては定義することが難しい。今回はひとまず英語の

12) 《现代汉语词典》第5版, 商務印書館, 2005年6月

名詞分類に倣い、性質、状態など、実体のない概念をすべて抽象概念とすることにする。¹³⁾

以上、本稿では、

- 一. “着”の意味
- 二. 前置動詞の性質
- 三. 後置目的語の性質

の3点、特に前置動詞と後置目的語の性質から、清末の小説《二十年目睹之怪現狀》に於ける用例を分析する。

3 《二十年目睹之怪現狀》における“着”の用法について

(1) 《二十年目睹之怪現狀》について

《二十年目睹之怪現狀》(以下《二十年》)は清末の譴責小説である。《官場現形記》《老殘遊記》《孽海花》と並んで四大譴責小説の一つとも位置づけられている。作者は吳趸人(1866-1910)^{14) 15)}、初出は《新小説》8-2年12号(24号)、光緒29年8月15日(1903年10月5日)から光緒31年12月(1906年1月)にかけて連載された。¹⁶⁾基本的に主人公「九死一生」の一人称で書かれている。吳趸人は広東南海の人であり、17歳で上海に渡っている。このことから、《二十年》には南方方言の影響が若干見られる。

(19) 他拿了, 说一声“承惠”(承惠二字是广东话, 义自明)便要走。

本稿では、《二十年》における“着”の用例を分析し、1900年代において“着”がどのように使われていたのか、新興語法的特徴は見られるのかどうかについて研究する。

13) しかしながら、中国語と英語はその名詞の抽象性と具象性の区別に関して、完全に対応しない点に留意する必要がある。林語堂(『開明英文文法』(1930, 開明書店, 山田和男訳『開明英文文法』1960年, pp. 119-121))は次のように述べている。「華語は、概念も心像(imagery)も極めて具象的なので、中国の学生には、英語の名詞の抽象的な概念がのみこめない者が多い。華語にくらべると、英語は抽象的な言葉が豊富である。例えば、華語ではageにたいしてはnien-ling(年令)という言葉があるが、sizeという抽象的な概念は、ta-hsiao(大小)というずっと具象的な言葉で表す。」

14) 徐友春主編『民国人物大辭典増訂版』河北人民出版社, 2007年1月

15) 吳沃堯, 筆名に我佛山人など。

16) 樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社出版社, 2002年4月(中国語版)

なお、資料には、CCL コーパス¹⁷⁾を使用する。

筆者の調査によれば、《二十年》に於ける“V着”の用例は全1635例（異なり語数355）。以下、用いられている動詞上位160例を挙げる。【表1】

【表1：《二十年》に於ける動態助詞“着”の前置動詞（上位120語）^{18) 19)}】

1	说	144	31	望 1	11	61	注	5	91	敞	3
2	跟	68	32	戴	10	62	哭丧	5	92	合	3
3	看	68	33	围	10	63	挺	5	93	领	3
4	拿	54	34	穿	10	64	学	5	94	哭	3
5	带	53	35	碍	10	65	照	5	95	访	3
6	接	37	36	嚷	10	66	听	5	96	吃	3
7	站	36	37	打	9	67	查	4	97	斜笠	3
8	指	31	38	关	9	68	锁	4	98	开列	3
9	放	29	39	背	9	69	谈	4	99	迎	3
10	忙	28	40	捧	9	70	逗	4	100	附	3
11	坐	28	41	刻	8	71	粘	4	101	约	3
12	留 1	25	42	逼	8	72	扶	4	102	扭	3
13	写	22	43	抱	8	73	光	4	103	插	3
14	仗	22	44	且慢	8	74	分	4	104	做	3
15	挂	16	45	扛	7	75	躺	4	105	管	3
16	赶	16	46	藏	7	76	叫	4	106	找	3
17	跪	15	47	催	6	77	张	4	107	闹	3
18	等	15	48	开	6	78	仰	4	108	攒	3
19	帮	15	49	守	6	79	搂	4	109	闭	3
20	对	14	50	搭讪	6	80	装	4	110	打听	3
21	答应	14	51	供	6	81	监督	4	111	拱	3
22	靠	13	52	偷	6	82	弯	4	112	低	3
23	拉	13	53	走	6	83	活	4	113	屈	3
24	摆	12	54	瞒	6	84	遇	4	114	办	3
25	住	12	55	招呼	5	85	贴	4	115	犯	2

17) CCL (Center for Chinese Linguistics PKU) コーパス (http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/) 北京大学語学研究中心, 2016年10月30日閲覧

18) “留”は「留める」という意味を“留1”, 「ある面に注意する, 気をつける」の意味を“留2”に分ける。また“记”は「記す」という意味を“记1”, 「覚えておく」という意味を“记2”に, “念”は「声に出して読む」という意味を“念1”, 「気にかける, 懐かしく思う」という意味を“念2”, “望”は「見る」という意味を“望1”, 「望む, 希望する」という意味を“望2”にそれぞれ分ける。どれも用例1が動作・変化動詞であり, 2が思考・心理活動動詞である。

19) “跟”は「付き従う」という動詞の意味を持つ例のみを採った。また, “忙”に関しても, 動詞の意味を持つ例のみを採る。

26	提	12	56	争	5	86	堆	4	116	定	2
27	抢	12	57	侧	5	87	伸	4	117	缀	2
28	笑	11	58	隔	5	88	欠	4	118	醒	2
29	押	11	59	钉	5	89	喝	4	119	拍	2
30	陪	11	60	握	5	90	预备	4	120	执	2

表からも分かるように、殆どが単音節の動作・変化動詞である。全用例中、1532例が動作・変化動詞²⁰⁾である。動作・変化動詞の異なり語数は333。これらの例は多く「動詞1+“着”+動詞2」の形で連動文を形成することが多いようである。しかしながら動作・変化動詞に“着”を付着させる用法は、近現代を通じて使用されており²¹⁾、ここに近現代に起こった変遷をみることは難しい。本稿では主に思考・心理活動動詞及び属性動詞に付着する用例について分析したい。

思考・心理活動動詞は95例（異なり語数18）、属性動詞は8例（異なり語数6）が見られた。

(2) 思考・心理活動動詞を伴う例について

2(1)でも述べたように、新興語法“V着”の特徴の一つとして、状態性の強い動詞（思考・心理動詞及び属性動詞）の後ろに置かれるというものがある。《二十年》の用例中には、全体の割合から見れば少ないながらも思考・心理活動動詞に“着”が付着した用例が見られる。使用されている動詞は以下の通り。【表2】

【表2：《二十年》に於いて動態助詞“着”に付着する思考・心理活動動詞】

1	想	46	10	念2	2
2	觉	18	11	记挂	2
3	记2	8	12	留心	1
4	恼	2	13	牵记	1
5	愁	2	14	闷	1
6	耽	2	15	狐疑	1
7	惦	2	16	牢牢记	1
8	惦记	2	17	宠	1
9	留2	2	18	怀	1

20) うち1例は成語“号啕大哭”を伴う。性質的に動作動詞に近いので、動作・変化動詞の例として採る。

“我到了局里，只看见一个司事，抱着一块虎头牌，在那里号啕大哭着，跑来跑去，一面哭着，嘴里嚷着叫老太太。”

21) 先行研究によれば、動作・変化動詞に“着”を付着させ、動態動詞として用いる用法は唐代には既に見られるという。

“想着”の用例が最も多く46例と全体のほぼ半分を占める。次点は“觉着”で18例、その下に“记着”の8例が見られるが、この3つはどれも《汉语大词典》には一語として収録されている。これらは“执着”、“爱着”らと同種の語彙であり、発音は“zhe”であったとしてもなお「附着」の意味で“着”が用いられている用例であると考えられる。動態助詞“V着”の用例としては、一旦分けて考えた方がよい。²²⁾ また、“记着”が一語であり、ここでの“着”が「附着」を表すとするならば、“惦记着”、“牵记着”、“牢牢记着”などもその影響から使用された可能性が高く（或いは“记挂着”、“惦记”も“记着”のように「附着」の“着”が用いられている例と見てもよい）、こうした例を除くと、《二十年》に於ける「思考・心理活動動詞+“着”」の用例は実際には15例程度のものであり、そのどれもが1、2回程度のみで使用であると考えられる。

“恼着”

- (20) 若是个独子呢，他又恼着老子在前，不能由得他挥霍，他还要恨他老子不早死呢！
(後置が動詞フレーズ)
- (21) 舅老爷先是恼着妹夫糊涂不肯去，禁不得元二爷再三央求，又叩头请安的说道：‘务望娘舅不看僧面看佛面，只算看我母亲的面罢。’(後置が動詞フレーズ)

“愁着”

- (22) 我便对蔡嫂道：“我办这件事时，正愁着找了出来，没有地方安插他；我们两个，又都没有家眷在这里。此刻他得了旧主人最好了，就叫他暂时在这里住着罢。”(後置が動詞フレーズ)
- (23) 阿弥陀佛！我这里个个月靠的是老爷寄来十两银子过活，此刻有大半年没寄来了，我娘儿两个正愁着没处过活，要投奔大少爷呢。(後置が動詞フレーズ)

“耽着”²³⁾

- (24) 我还耽着心，恐怕他惧罪，不知逃到哪里去，就可惜了这个人了。(述語)
- (25) 终夜耽着这个心，竟夜不曾合眼。(述語)

22) 稲垣(2016)参照。

23) “耽心”の離合詞である。

“留着心”，“留心着”，“留着神”

- (26) 兄弟这里只管留着心，有甚差事出了，再来关照罢。(述語)
- (27) 这个人自然感激他，他却留着神看你是第几班第几名，记了你的名字，打听了你的住处，……(後置が動詞フレーズ)
- (28) 姊姊道：“你只要在旁边留着心看我画，看多了就会了，难道还要把着手教么。”(後置が動詞フレーズ)

“念着”

- (29) 只因这位大帅，念着他们是共过患难的人，待他们极厚，真是算得言听计从的了，所以他们死命的跟着，好仗着这个势子，在外头弄钱。(後置が名詞フレーズ，具象)
- (30) 继之道：“他感激你得很呢，时时念着你。……”(後置が名詞，具象)

“闷着”²⁴⁾

- (31) 雪舫此时却不来了，终日闷着一肚子气，没处好告诉，没人好商量。(述語)

“狐疑”

- (32) 一路狐疑着回去，要问继之，偏偏继之又出门拜客去了。(後置が動詞)

“宠着”

- (33) 你家祖宗留下来的那一条家法，宠着媳妇儿，派娘的罪案？(後置が名詞，具象)

“怀着”

- (34) 但是那偷东西的心中，暗暗欢喜；那不是偷东西的，倒怀着鬼胎，不知主人疑心的是谁。(後置が名詞，抽象)

これらの例の後置成分について見てみると、後ろに動詞及び動詞フレーズを持つ例が²⁾(20)(21)(22)(23)(27)(28)²⁵⁾(32)の7例、後ろに名詞及び名詞フレーズを持つ例が²⁾(29)(30)

24) “闷气”の離合詞である。

25) (27)“留着神”，(28)“留着心”の離合詞の用例は厳密に言えば“V着N”を形成しているが、ここでは連動文構造になっているので後置成分が動詞の例とした。

(33) (34) の4例, 述語としての例が²⁶⁾ (24) (25) (26) (31)²⁶⁾ の4例である。後ろに名詞及び名詞フレーズの目的語を伴う場合, 新興語法としての用法の場合, 抽象名詞が多いとされるが, 《二十年》に於いては多くが具象的な目的語であり, 抽象名詞を伴う例は (34) “怀着鬼胎”のみであった。

更に, 新興語法の特徴として, 「着」を付けなくても意味上大きな違いがなく、文章が成立する」というものがある。これら15の例のうち, “着”を取り去っても意味が変わらないものは, “耽着”, “留着”, “念着”を用いた例のみではないだろうか。

(3) 属性動詞を伴う例について

動態助詞“V着”の構造に於いて, 属性動詞を伴う例は最も稀な例であると考えられる。だが先行研究が述べているように, 五四時期以降, “有着”のような例は多く見られるようになっており, また, 筆者の調査でも1920年代以降 “存在着”, “在着”のように存在を表す動詞が“着”を伴う例が散見される。《二十年》に於いては, 全部で8例(異なり語数6)の用例が見られる。【表3】

【表3：《二十年》に於いて動態助詞“着”に付着する属性動詞】

1	存	2
2	无	2
3	处	1
4	当	1
5	在	1
6	关	1

“存着”

(35) 然而骨子里还是存着病根。(後置が名詞, 抽象)

(36) 外面报过废的照, 却不肯销毁, 仍旧存着, 常时填上个把功名, 送给人作个顽意儿(述語)

26) (24) “耽着心”, (25) “耽着这个心”, (31) “闷着一肚子气”の例はそれぞれ離合詞であり, 厳密に言えば“心”, “气”といった目的語を持っているが, ここでは述語としての例とした。

“无着”

- (37) 我本来正愁这房饭钱无着，听了这话，自是欢喜。(述語)
- (38) 谁知他打发出来的几个姨娘，与及开除的男女仆人，不免在外头说起，更有那朱博如，虽说是写了伏辩，不得在外造言生事，那禁得他一万银子变了七千，七千又变了七十，七十再一变，是个分文无着，还要写伏辩，那股怨气如何消得了，总不免在外头逢人伸诉。(述語)

“处着”

- (39) 你想我在这种境地上处着，忽然天外飞来一个绝不相识、绝不相知之人，赏识我于风尘之中，叫我焉得不感！(述語)

“当着”

- (40) 那总巡只怕是一位惧内的，奉了阍令，不敢有违，就同他谋了个看城门的差事，此刻只怕还当着这个差呢。(後置が名詞，具象)

“在着”

- (41) 少爷也生过几位了，听说最大的大少爷，如果在着，差不多要三十岁了，可惜都养不住。(述語)

“关着”

- (42) 女儿虽是姓言，却是我生下来的，须知并不是你一个人的女儿。是关着女儿的，无论甚么事，也应该和我商量商量，何况他的终身大事！(後置が名詞，具象)

この内、(40)“当着”は動作・変化動詞に近い動詞であり、“关着”に関しては、“关于”の意味で用いられているため、介詞と採ってもよい。つまり、実際には存在と所有を表す“存着”、“无着”、“处着”、“在着”の例のみが《二十年》に於ける「属性動詞+“着”」の用例といえるであろう。後置が動詞の例は存在せず、後置が名詞の例が(35)(40)(42)の3例、述語の例が(36)(37)(38)(39)(41)の5例。抽象名詞を目的語に持つ例は(35)“存着病根”の1例のみである。“着”を取り去った場合、文章として成立するかどうかについては、判断が難しいが、“在着”の例は成立すると考えられる。

(4) 《二十年目睹之怪现状》に於ける“着”の用法まとめ

以上のことより、《二十年》に於ける“着”の用法には次のことが言える。

- 一. 9割以上が動作・変化動詞を伴う。中でも多くが単音節動詞である。
- 二. 数は少ないが、思考・心理活動動詞を伴う例もある。これらは後ろに動詞及び動詞フレーズを持つ例が最も多いが、名詞及び名詞フレーズを持つ例や、述語の例も存在する。これらの例のうち、抽象名詞が後置される例は1例のみである。“着”を取り去っても意味が変わらない用例は、“耽着心”、“耽着这个心”、“留心着”、“留着神”、“留着心”、“念着他们施工过患难的人”、“念着你”の7例が見られる。
- 三. 更に数は少なくなるが、属性動詞を伴う例も存在する。抽象名詞が後置される例は1例のみ。“着”を取り去った場合でも“在着”の例のように成立し得る例もある。

つまり、《二十年》には僅かながら新興語法的特徴に通じる例が見られるということである。しかし、これらの例はコーパス²⁷⁾による調査では清代以前にも使用が見られる。

(43) 听人说，这位姓马的他还在着呢，不知我们老掌柜的他因何供他，他也不说。”

(清《康熙侠义传》)

(44) 倘然两件事都无着，如何是好？

(清《儿女英雄传》)

“在着”や“无着”の例は新興語法的特徴を持っているようではあるが、少ないとは言え中国に清代以前より存在する用法であると考えられる。これらの用例が1920年代以降の用例に影響を与えた可能性もあるが、1920年代以降の用例と比較すると、やはり極個別的で限られた用法であると言えよう。

4 前後の時代との比較

(1) 《儒林外史》との比較

では、《二十年》の用例は前後の年代と何か違いがあるのであろうか。18世紀の白話小説《儒林外史》と比較を行った。

27) CCL コーパス

《儒林外史》に於ける動態助詞“着”の用例は管見の限りでは全1896例、前置成分の異なり語数は、346。これらの語はほとんどが動作動詞及び変化動詞であり、単音節の語である。【表4】

【表4】《儒林外史》に於ける動態助詞“着”の前置成分（上位100語）²⁸⁾

1	坐	135	26	笑	15	51	押	8	76	抬	5
2	说	102	27	挂	14	52	打	8	77	养	5
3	拿	70	28	赶	14	53	听	8	78	睁	5
4	遇	59	29	候	13	54	问	8	79	闭	5
5	吃	50	30	等	13	55	守	7	80	挨	4
6	穿	47	31	背	13	56	愁	7	81	掩	4
7	带	45	32	扶	13	57	走	7	82	横	4
8	看	42	33	贴	13	58	拍	7	83	隔	4
9	接	41	34	挑	12	59	开	7	84	算	4
10	指	36	35	点	12	60	携	6	85	循	4
11	写	35	36	站	12	61	低	6	86	争	4
12	捧	35	37	关	12	62	提	6	87	多	4
13	留	32	38	收	11	63	念	6	88	都	4
14	放	31	39	靠	11	64	伏	6	89	插	4
15	望	30	40	合	10	65	立	6	90	簇拥	4
16	领	30	41	围	10	66	捐	6	91	腆	4
17	陪	25	42	帮	10	67	瞒	6	92	丢	4
18	拉	24	43	摇	10	68	红	6	93	劝	4
19	跪	22	44	含	9	69	映	5	94	夹	4
20	迎	20	45	催	9	70	供	5	95	拦	4
21	想	20	46	抱	9	71	大	5	96	锁	4
22	戴	19	47	悬	9	72	披	5	97	安	3
23	摆	19	48	拄	9	73	奉	5	98	叫	3
24	引	18	49	闲	9	74	乘	5	99	系	3
25	哭	18	50	骑	9	75	做	5	100	硬	3

まず、前置される動詞を比較すると、動作・変化動詞については特筆すべき箇所はないようである。注目したいのは、思考・心理活動動詞及び属性動詞に関してである。

《儒林外史》に於いて思考・心理活動動詞は30例（異なり語数4）みられる。使用されているのは“想”が最も多く20例、続いて“愁”7例、“恋”2例、“欢喜”1例である。このうち、

28) この表は【表1】と異なり、形容詞なども含まれている。

“愁”は全て後ろに“眉”が来るため、“愁眉”という一語で採った方がよく、「思考・心理活動動詞」とは考えにくい。²⁹⁾更に、前述の通り“想着”や“恋着”は一語として採れるため、実際には《儒林外史》に於ける思考・心理活動動詞に動態助詞“着”が付着する例は“欢喜着”の1例のみである。また、属性動詞を伴う例はない。³⁰⁾

《二十年》の全体の用例は全1635例（異なり語数355）であり、《儒林外史》全体の用例より若干少ないにも関わらず、思考・心理活動、属性動詞の用例は《儒林外史》よりも豊富であるといえる。特に、属性動詞の用例が見られることが《儒林外史》との違いである。

例(43)“在着”に挙げた《康熙侠义传》は1892年（光緒18年）発刊であり、(44)“无着”に挙げた《儿女英雄传》の成立は道光年間、発刊は1878年（光緒4年）である。《儒林外史》と《二十年》、《康熙侠义传》、《儿女英雄传》などの作品間にある差異が歴史的な変遷なのか、作者の方言的な差異によるものなのかは、今後詳しく検討する必要があるであろう。

(2) 民国期の中国語との比較

《二十年》に見られるような「属性動詞＋“着”」の用例は、1910年代の他の作品にも見ることができる。

- (45) 但學費還是無着。不得已將雜貨店過於他人。得了數百塊洋錢。
 (46) 所以家用倒還不愁。但是樸生的學費無着。這種困難。我也不必細講了。
 （顧冷觀〈電通〉《小説月報》9卷5号，1918年）

“在着”ではなく“存在着”の用例になるが、コーパスによれば、1916年にはすでに“存在着”の使用も見られるようである。

- (47) 郑公子笑着说：“男女之间，存在着相悦的欲望，如果两人情意相投，就是父母也限制了。”（曹繡君編集《古今情海》上海進步書局，1916年再版）³¹⁾

また、翻訳作品の中にも現れる。

29) 《二十年》で見られた“留心”などの例ははっきりと動詞＋目的語構造を保っているが“愁眉”の場合、両者の結びつきが比較的強いいため。

30) “关着”の例が12例あるが、これも実際には介詞と採るべき例である。

31) 樽本（2002）参照。

- (48) 俺們出其不意 將門開了 躡將進去 便有怪賊在著他不及防備 (吳濤 〈俠女郎〉《小説月報》3卷10-11号, 1913年)
 決して私等の近づいた事を知らせず、不意に此扉を開けて入込めば、假令怪賊が居つたにしても、先方は油断をして居るから、リミニー姫に危害を加へる違もなく、…… (押川春浪『女侠姫』1911年)
- (49) 我想到絹姑剥着梨子拿到只我一人在着的浴室裏來, 想到二個人沿着溪流散步, 想到伊柔和的話, 想到伊爛漫的態度, 想到伊底笑顏, 便不知不覺地敲着書桌喊道, 『明天朝晨去吧!』(《湯原通信》)
 僕はお絹が梨をむいて、僕が獨で入いつている浴室に、そつと持て來て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿ふて散歩したことを思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を思ひ、其笑顏を思ひ、思はず机を打つて、『明日の朝に行く!』と叫んだ。(『湯ヶ原より』)
- (50) 但已經曉得絹姑之後的我, 那絹姑不在着的地方, 實成了不愉快的地方了。(同上)
 然し既にお絹を知つた後の僕には、お絹の居ないことは寧ろ不愉快の場所となつてしまつたのである。(同上)

こうした例は一見新興語法のようなのであるが、《二十年》や例(43)(44)の例を見るに、限定的とはいえ清代以前より中国語として用いられている用法であるといえる。

また、五四時期以降現れたとされる“V着”の用法として代表的な“有着”だが、ここで挙げた“无着”と何らかの関係があるのであろうか。今後も引き続き調査が必要である。

(3) 《二十年》に於ける“V着”の歴史的 위치づけ

《二十年》の“V着”を1900年代の用例として、その前後の時代の用例と比較した結果、以下のことが分かった。

- 一. 動作・変化動詞の用例は、18世紀、1910年代以降の用例と比較しても違いは少ない。
- 二. 18世紀の小説《儒林外史》と比較すると、思考・心理活動、属性動詞の用例が豊富である。
- 三. 19世紀末から20世紀初頭1910年代にかけて、“无着”、“在着”といった「属性動詞+“着”」の用例が中国語小説、翻訳小説問わず散見される。

こうした特徴について、特に思考・心理活動、属性動詞に“着”が付着する用例の増加が単に筆者の語感に由来するものではなく歴史的なものであり、1900年代までに起こった変化の一つであるかどうかに関しては、現時点ではまだはっきりとはいえないが、“无着”、“在着”のような一見新興語法に思える例が、清末の段階ですでに用例があることは見逃せない。これらは五四時期以降の用例とは異なり、抽象的な目的語を持つことは少ないようだが、抽象名詞“欲望”を持つ(47)“存在着”のような例も1910年代にすでに見られるとするならば、「新興語法」としての“V着”について、再定義し直す必要があるであろう。

5 小結

本稿では、

- 一. 状態性の強い動詞（思考・心理動詞及び属性動詞）の後ろに置かれる。
- 二. 目的語は抽象的なものであることが多い。
- 三. “着”を付けなくても意味上大きな違いがなく、文章が成立する。
- 四. “一直”と置きかえることが可能な場合が多い。

といった特徴を持つと考えられる「新興語法」の“着”に関して、その用法が近現代どのように変遷したのか、そこに外国語の影響があったのか否かに関する研究の一環として、《二十年目睹之怪現狀》中の“着”の用法を分析し、1900年代の“着”の使用状況について検討した。

その結果、《二十年》の“V着”構造について以下のことが分かった。

- 一. 《二十年》に於いて“着”に付着する動詞は、動作・変化動詞>思考・心理活動動詞>属性動詞であり、9割以上が動作・変化動詞を伴う。また、その多くが単音節動詞である。
- 二. 思考・心理活動動詞を伴う例も若干ある。これらは後ろに動詞及び動詞フレーズを持つ例が最も多いが、名詞及び名詞フレーズを持つ例や、述語の例も存在する。これらの例のうち、抽象名詞が後置される例は1例のみである。
- 三. 属性動詞を伴う例も6例程度存在する。抽象名詞が後置される例は1例のみ。“着”を取り去った場合でも“在着”の例のように成立し得る例もある。

更に、前後の年代と比較すると、以下のことが言える。

- 四. 動作・変化動詞の用例は、前後の年代と比較しても違いは少ない。
- 五. 18世紀の小説《儒林外史》と比較すると、思考・心理活動、属性動詞の用例が豊富である。
- 六. 《二十年》に見られた“无着”，“在着”といった「属性動詞＋“着”」の用例は、19世紀末から1900年、1910年代に至るまで散見される。19世紀末の用例，《二十年》に於ける用例は1920年代以降の用例とは異なり、抽象名詞を持つことはないようであるが、1916年の用例は抽象名詞を伴う。

今後の課題として、“无着”，“在着”（或いは“存在着”も含む）のように最も“着”が付着しづらいと考えられる「属性動詞＋“着”」の例について再考した上で「新興語法」としての“V着”を再定義する必要がある。また、こうした用例に於ける“着”は何を表しているのか。何を由来とするのか。これらの用例と五四時期以降濫用された“有着”にはどのような関係があるのであろうか。引き続き調査を続けたい。

参考文献

- 林語堂 1930『開明英文文法』開明書店（山田和男訳『開明英文文法』1960年）
- 王力 1945《中国語法理論》（〈第六章 欧化的語法〉《王力文集》第一卷 山東教育出版社 1984年11月）
- 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』朋友書店
- 北京師範学院中文系漢語教研組編著 1959《五四以来汉语书面语言的变迁和发展》商務印書館
- 陳剛 1980〈試論“着”的用法及其与英語進行時的比較〉《中国語文》第1期 商務印書館
- 荒川清秀 1985「“着”と動詞の類」『中国語』7月号
- 江澄 1986“有着”小志《中国語文》第2期 商務印書館
- 譚枝宏 1987《〈儿女英雄傳〉中助詞“着”的使用》《安慶師範学院学报》第4期
- 費春元 1992〈說“着”〉《語文研究》第2期
- 刁晏斌 1999《初期現代漢語語法研究》中華發展基金管理委員會 洪葉文化事業有限公司
- 劉月華・潘文娉・故韡 2001《实用現代漢語語法（增訂本）》商務印書館
- 呂叔湘主編・牛島徳次・菱沼透監訳 2003『中国語文法用例辞典』東方書店（《現代漢語八百詞增訂本》日本語版）
- 王学群 2007『中国語の“V着”に関する研究』白帝社
- 賀陽 2008《現代漢語欧化語法現象研究》商務印書館
- 木村英樹 2012『中国語文法の意味とカタチ——「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究——』白帝社
- 稲垣智恵 2016「新興語法としての“着”について」『關西大學中國文學會紀要』第37号
- CCL (Center for Chinese Linguistics PKU) コーパス (http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/) 北京大学語言学研究中心
- BCC コーパス (<http://bcc.blcu.edu.cn/>) 北京語言大学大数拋與語言教育研究所